

IV 鹹水性白点病類症の魚病について

1. 魚病の発生状況

昭和52年度以降毎年鹹水性白点病に類似した魚病（原虫の寄生）が主として親魚池で発生し被害を受けている。この鹹水性白点病類症による被害状況を表-5に示した。昭和52・53年度はハマフエフキ、イツフエフキが発病感染していたが昭和54年度にはこの寄生虫に強いと思われていたミナミクロダイまでも感染し収容尾数の43%の親魚が被害にあって斃死している。この魚病の発生時期は当初4～5月頃発生する傾向にあったが昭和53年度には真夏の高水温の7月に発生、昭和54年度は低水温期の1月下旬から2月上旬に発生している。発生時の水温は昭和52年、20～22℃、昭和53年度は20～30℃、昭和54年度は18～22℃となっており、水温の高低を問わず18～30℃の広範な温度域で発生している。

表5. 鹹水性白点病類症による被害状況

年 月	魚 種	飼育水槽	収容尾数	斃死尾数	平均尾叉長
		t	尾	尾	cm
昭和52年4月	ハマフエフキ（親魚）	60	10	10	45.7
“ 5月	“（“）	200	11	11	—
“ 5月	イツフエフキ（成魚）	1.5	20	20	—
昭和53年4月	ハマフエフキ（親魚）	60	12	12	44.3
“ 7月	“（稚魚）	60	—	—	（ふ化後95日）
“ 7月	“（親魚）	60	13	13	39.6
昭和54年1月	“（幼魚）	60	770	733	12.4
“ 2月	ミナミクロダイ（親魚）	60	67	38	33.0

これまでの経験によるとこの原虫の発生は通気をしない水槽よりも通気をした水槽、さらに水槽容積では容積が小さい程、また屋外水槽よりも室内水槽が発生しやすいようであり親魚池では特に発生回数が多い。親魚池では産卵期間中にかけて親魚への刺激をさけるため水槽の底掃除をひかえること、さらに採卵網設置にともない注水量を減らすため飼育水の交換率が小さくなることがこの寄生虫の繁殖を助長しているのではないかと推察される。

親魚を安全に養成し、安定した採卵を可能にするため、次の点に留意する必要があると思われる。

- 屋外の大型水槽を使用し通気は行わずできるだけ給水量を多くし、飼育水の交換率を良くする。
- 水槽底は残査物がない状態にするため適切な底掃除を行なう。
- 親魚を複数の水槽へ収容し危険の分散を図る。
- 産卵期間中も平常の給水状態で採卵が可能ないように採卵方法を改善する。